

市町村だより

また、前回の5歳階級別に今回の1ランク上位の5歳階級別とを比較しますと、全階級にわたって減少化現象を示しています。高年齢者層においては、死亡要因と思われるが、それを除き各世代にわたり転出が転入を上回る流出超過現象いわゆる社会減があることが窺えます。

一方、これを年少人口、生産年齢人口および老年人口別に前回と比べると、構成比別にはほとんど変化はみられません。実数では年少人口で990人の減(6.8%減)、生産年齢人口で828人の増(2.2%増)、老年人口で848人の増(24.3%増)となっており、年少人口の減少と老年人口の増加が著しくなっています。また、これを地域別にみると市街地においては、年少人口比が低く、老年人口比が高い傾向を示しています。

なお、本市の平均年齢は、32.7歳(男32.0歳、女33.4歳)でした。前回が30.8歳(男30.0歳、女31.5歳)でしたので1.9歳上回ったこととなります。

4. 産業別人口

就業者総数では、ほぼ人口増加と見合う651人2.5%の増加となりました。

また、就業者を産業別にみた場合、第1次産業就業者は873人(構成比今回3.3%、前回4.2%)、第2次産業就業者は11,247人(構成比今回42.7%、前回42.0%)、第3次産業就業者は14,210人(構成比今回54.0%、前回53.4%)となっています。

これを前回と比べると第1次産業就業者が初めて1,000人を割り、実数で212人、率にして19.5%の減少となり、また、第2次産業就業者は、452人4.2%の増、第3次産業就業者は、499人3.6%の増となりました。

また、これを小学校区ごとにみると第1、第2小学校区は、第3次産業就業者が60%台と比較的高く、第4、第7小学校区では、第1次産業就業者が他の地域が1%前後で

表一 年齢(5歳階級)男女、前回別人口

年 齢 (5歳階級)	昭 和 50 年			昭 和 55 年			増 減 数			増 減 率		
	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女
総 数	55,973	27,508	28,465	56,656	27,947	28,709	683	439	244	1.2%	1.6%	0.9%
0～4歳	5,057	2,640	2,417	3,905	1,994	1,911	△1,152	△646	△506	△22.8	△24.5	△20.9
5～9	4,793	2,482	2,311	4,867	2,495	2,372	74	13	61	1.5	0.5	2.6
10～14	4,615	2,370	2,245	4,703	2,437	2,266	88	67	21	1.9	2.8	0.9
15～19	4,352	2,064	2,288	4,431	2,157	2,274	79	93	△14	1.8	4.5	△0.6
20～24	4,260	1,995	2,265	3,758	1,780	1,978	△502	△215	△287	△11.8	△10.8	△12.7
25～29	5,149	2,541	2,608	4,165	2,105	2,060	△984	△436	△548	△19.1	△17.2	△21.0
30～34	4,781	2,393	2,388	5,023	2,526	2,497	242	133	109	5.1	5.6	4.6
35～39	4,534	2,274	2,260	4,670	2,335	2,335	136	61	75	3.0	2.7	3.3
40～44	4,417	2,229	2,188	4,413	2,216	2,197	△4	△13	9	△0.1	△0.6	0.4
45～49	3,680	1,932	1,748	4,287	2,153	2,134	607	221	386	16.5	11.4	22.1
50～54	2,655	1,218	1,437	3,480	1,830	1,650	825	612	213	31.1	50.2	14.8
55～59	2,196	953	1,243	2,559	1,168	1,391	363	215	148	16.5	22.6	11.9
60～64	1,987	892	1,095	2,053	867	1,186	66	△25	91	3.3	△2.8	8.3
65～69	1,470	694	776	1,829	815	1,014	359	121	238	24.4	17.4	30.7
70～74	992	447	545	1,233	559	674	241	112	129	24.3	25.1	23.7
75～79	615	259	356	728	321	407	113	62	51	18.4	23.9	14.3
80～84	287	88	199	373	133	240	86	45	41	30.0	51.1	20.6
85歳以上	130	36	94	179	56	123	49	20	29	37.7	55.6	30.9
年齢不詳	3	1	2	—	—	—	△3	△1	△2	—	—	—

市町村だより

あるのに対し、12%台を示し農業色が比較的高い地域であることが窺えます。

この労働力率を男女別にみると男子が81.5%で、女子が44.2%となっています。

5. 労働力人口

15歳以上人口43,181人のうち就業者は26,330人、完全失業者は、590人でこの両者を合わせた労働力人口は、26,920人となり、労働力率は62.3%となっています。

また、これを対前回比でみると労働力率は、昭和45年をピークに低下してきています。この要因としては、高学歴化による若年労働力の減少、高齢者の増大、低経済成長などが考えられます。

表一三 従業地・産業別15歳以上就業者数

年次別	従業地別 産業別	総数	本市で従業			他市町村で従業		
			計	自宅	自宅外	計	県内	県外
昭和五十年	第1次産業(人)	1,085	1,078	1,009	69	7	4	3
	第2次産業(人)	10,795	5,859	2,251	3,608	4,936	1,788	3,148
	第3次産業(人)	13,711	8,985	4,610	4,375	4,726	978	3,748
	計(人)	(100.0) 25,679	(62.3) 15,994	7,898	8,096	(37.7) 9,685	2,773	6,912
昭和五十五年	第1次産業(人)	873	849	817	32	24	14	10
	第2次産業(人)	11,247	5,852	2,353	3,499	5,395	2,141	3,254
	第3次産業(人)	14,210	8,778	4,194	4,584	5,432	1,188	4,244
	計(人)	(100.0) 26,330	(58.8) 15,479	7,364	8,115	(41.2) 10,851	3,343	7,508
比較増減数	第1次産業(人)	△212	△229	△192	△37	17	10	7
	第2次産業(人)	452	△7	102	△109	459	353	106
	第3次産業(人)	499	△207	△416	209	706	210	496
	計(人)	651	△515	△534	19	1,166	570	596
増減率	第1次産業(%)	△19.5	△21.2	△19.0	△53.6	242.9	250.0	233.3
	第2次産業(%)	4.2	△0.1	4.5	△3.0	9.3	19.7	3.4
	第3次産業(%)	3.6	△2.3	△9.0	4.8	14.9	21.5	13.2
	平均(%)	2.5	△3.2	△6.8	0.2	12.0	20.6	8.6

〔注〕()中の数字は、本市内と市外の就業者の割合である。

表一四 労働力状態

区分	昭和50年			昭和55年			増減数			増減率		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
総数	41,505	20,015	21,490	43,181	21,021	22,160	1,676	1,006	670	4.0%	5.0%	3.1%
就業者	26,186	16,658	9,528	26,920	17,134	9,786	734	476	258	2.8%	2.9%	2.7%
完全失業者	25,679	16,267	9,412	26,330	16,710	9,620	651	443	208	2.5%	2.7%	2.2%
主に仕事	21,785	15,990	5,795	21,936	16,416	5,520	151	426	△275	0.7%	2.7%	△4.7%
家事のほか仕事	3,506	50	3,456	3,969	58	3,911	463	8	455	13.2%	16.0%	13.2%
通学のかたわら仕事	162	65	97	191	71	120	29	6	23	17.9%	9.2%	23.7%
仕事を休んでいた	226	162	64	234	165	69	8	3	5	3.5%	1.9%	7.8%
完全失業者	507	391	116	590	424	166	83	33	50	16.4%	8.4%	43.1%
非労働力	15,319	3,357	11,962	16,261	3,887	12,374	942	530	412	6.1%	15.8%	3.4%

市町村だより

6. 従業地別就業者数

就業者総数では、前回と比べ651人2.5%増加しましたが、本市内での就業者は、515人3.2%減少しました。これは、市内就業者のうち自宅外就業者は、19人0.2%増加したのかかわらず、自宅就業者は、534人6.8%減少したことによります。

一方、他市町村での就業者は、1,166人12.0%増加しました。この結果本市内就業者と他市町村就業者の割合は、前回は本市内就業者62.3%（15,994人）と他市町村就業者37.7%（9,685人）であったのが、今回は58.8%（15,479人）と41.2%（10,851人）と本市内就業者の比重が低くなりました。

これを産業別にみた場合、他市町村就業者は、第1次～第3次産業とも増加しているのに対し、本市内就業者は、第1次～第3次産業とも減少しています。

また、他市町村での就業者を県内と他県に分けてみた場合、前回は県内2,773人（28.6%）、他県6,912人（71.4%）であったのが、今回は県内3,343人（30.8%）、他県7,508人（69.2%）となり、県内就業者の比重が高くなっています。

県内では、総和町への就業者が断然高く、県内他市町村就業者の75.9%を占め、次いで三和町6.0%、境町3.8%の順となっています。

県外では、東京都への就業者が県外就業者の46.9%を占

め、次いで埼玉県28.9%、栃木県20.8%となっています。

7. 配偶関係、年齢、男女別人口

15歳以上人口は、43,181人で男子21,021人、女子22,160人となっており、性比(女子100人に対する男子の割合)は、94.9となっています。全人口の性比が97.3ですから、2.4ポイント低くなっています。また、これを年齢別にみると15～24歳層および55歳以上層で女子が多く、25～54歳層で男子が多くなっています。

若年層では、男子の転出が女子の転出を上回ること、高齢層では、女子の平均寿命が高いこと等がその要因として考えられます。

15歳以上人口に対する未婚者の割合は、男子28.9%女子22.5%ですが、30～34歳台でみた場合、男子は25.4%約4人に1人が未婚であるのに対し、女子は9.3%約10人に1人が未婚となっており、昭和45年の国勢調査と比べると結婚年齢が大幅におそくなっています。

また、有配偶者の割合は、男子67.8%女子64.4%となっていますが、これを年齢別にみるとある一定年齢までは、未婚率と反比例して増加していますが、男子の場合50～54歳台(有配偶率94.5%)をピークにゆるやかに下向していくのに対し、女子の場合40～44歳台(有配偶率90.9%)をピークとし、60歳台以降急激に減少傾向を示しています。

表一五 常住地による従業・通学地別15歳以上就業者数・通学者数

区 分	総 数	本市で従業・通学			他市町村で従業・通学			市 内 ・ 市 外 就 業 ・ 通 学 者 比 較			
		計	自 宅	自宅外	計	県 内	県 外	市 内	市 外		
昭 五 和 十 年	総 数 (人)	29,583	17,974	7,898	10,076	11,609	2,933	8,676	60.8	39.2	
	就 業 者 (人)	25,679	15,994	7,898	8,096	9,685	2,773	6,912	62.3	37.7	
	通 学 者 (人)	3,904	1,980	—	1,980	1,924	160	1,764	50.7	49.3	
昭 五 和 十 五 年	総 数 (人)	30,537	17,632	7,364	10,268	12,905	3,714	9,191	57.7	42.3	
	就 業 者 (人)	26,330	15,479	7,364	8,115	10,851	3,343	7,508	58.8	41.2	
	通 学 者 (人)	4,207	2,153	—	2,153	2,054	371	1,683	51.2	48.8	
比 較	増 減 数	総 数 (人)	954	△342	△534	192	1,296	781	515	—	—
	就 業 者 (人)	651	△515	△534	19	1,166	570	596	—	—	
	通 学 者 (人)	303	173	—	173	130	211	△81	—	—	
増 減	増 減 率	総 数 (%)	3.2	△1.9	△6.8	1.9	11.2	26.6	5.9	—	—
	就 業 者 (%)	2.5	△3.2	△6.8	0.2	12.0	20.6	8.6	—	—	
	通 学 者 (%)	7.8	8.7	—	8.7	6.8	131.9	△4.6	—	—	

離、死別者の割合を男女別にみると、男子3.3%であるのに対し、女子は13.1%となっています。死別の場合、男子においてはゆるやかに増加しているのに対し、女子においては60歳台以降急激に増加しています。一方、離別においては各年齢層の割合は、顕著な変化はみられません。また、これを前回と比べると死別者は、わずかではありますが増加しているのに対し、離別者は増大しています。

8. 単身高齢者世帯数

60歳以上の高齢者(以下「高齢者」という)のうち、単身世帯を集計したのが表一6です。

高齢者総数6,395人(男子2,751人、女子3,644人)ですが、そのうち単身世帯の高齢者は、総数479人(7.5%)、男子92人(3.3%)、女子387人(10.6%)で、女子は男子の4.2倍になっているとともに、女子高齢者の約10人に1人が単身世帯となっています。

これを学校区別にみると旧市街地の第1、第2小学校区の高齢者世帯の割合が高く、この2小学校区で全体の58.0%となっています。反面低いのは、旧新郷地区の第7小学

校区の1.5%、第4小学校区の4.6%となっています。また、その学校区に居住する高齢者の割合からみると第5小学校区の10.5%が最も高く、第7小学校区は2.1%、第4小学校区は3.3%と低くなっています。

おわりに

ここにご紹介したものは、私共で公表した概要書の一部ですが、本市としては始めて試みた独自の集計であり、分析です。

したがって、この集計は、あくまでも概数であり、後日総理府で公表する数字と異なる場合があります。

今回、集計し分析していくに当たっては、手引書や指導書等がほとんどないなかで、できるかぎりのクロス分析等を試みましたが、経験不足や時間的制約等もあって、全項目にわたる集計や十分な分析はできませんでした。

この集計は、町丁字別にも集計してあることでもあり、今後引き続き、より細かく分析し、地域別の正確な現況分析に努めていくとともに、他の調査資料等と併せ分析しながらより精度の高い現況把握をしていきたいと存じます。

(古河市市長公室企画財政課
課長補佐 針谷晴夫)

表一6 男女別単身高年齢者世帯数

(単位:世帯)

区分	総数	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80～84歳	85歳以上
総数	479	157	129	97	49	36	11
男	92	30	22	17	14	7	2
女	387	127	107	80	35	29	9

— 都市統計事務協議会総会開催さる —

6月29日(月)、水海道市の緑濃い菅生沼湖畔に設けられた「あすなろの里」において、県下17市から30名近い統計担当職員が出席して、昭和56年度茨城県都市統計事務協議会総会が開かれました。会長・落合水海道市長の議長で、55年度事業報告及び決算、統計事務の研究・研修、都市統計書の刊行等の56年度事業計画及び予算が承認・可決され、次期会長市常陸太田市に引き継がれました。なお常陸太田市から大繩助役が、県から来賓として驚見統計課長が出席しました。

【その他の行事】

5月26日 昭和56年度久慈多賀町村統計事務研究会定

例総会(大子町自然休養村センター)
6月4日 昭和56年度猿島郡統計事務研究会定期総会(境町役場)
6月5日 稲敷郡統計事務研究会主催事業所統計調査事務研究会(阿見町役場)
6月8～9日 昭和56年度那珂郡統計事務研究会定期総会(栃木県塩原町)
伊奈村統計調査員研修(千葉県鴨川市)
6月19日 桜村統計調査員総会及び実務研修会(桜村役場)
6月24～26日 第25回東村統計調査員大会(北海道)

新人のプロフィール

6月の定期異動及び56年度新規採用で新たに統計課勤務となった12名を紹介します。



雑木雑器のたのしみ

課長補佐(総括)
青木 栄

このたび、統計課で皆さんと一緒に仕事をするようになった。この出会いを私の生涯に、楽しい思い出となるような節の始まりにしたいと思っている。

盆栽は、各自各様に仕立て好きなように眺めればそれでよいと思う。老樹大木の面影があって豪壮にして雄大な眺めなどというのは、私にはちょっと縁遠い。雑木が主であるが、山取りなどは26、7年たっており結構、春の芽吹き、夏の青葉、秋の紅葉、冬の裸木も眺められ心に安らぎを得ることができる。1鉢1鉢に子供の成長の記録や、過ぎ去ったある日の思い出が秘められており、駄物ではあるが、捨て難いものである。さつきは花持ちが悪かったが、わが家に美と潤いを添えてくれた楽しいものである。

古陶器の小皿、酒屋から1升、2升と買ってくるために作られた通い徳利、薬をせんじたり、茶を出したりした土瓶、安定感がある壺など座辺のよき友としているが、あまり高価なものはない。庶民のふだんの雑器として作られたこれら民芸の美しさに愛着が増し、しみじみと手に触れ眺める時など心の静まりが感じられ実によいものである。

22年の国調の湯呑みも、若きよき時代の思い出としてこれらのものと一緒にとって置きたかったが、引越しの時なくしてしまったのが、惜しまれてならない。



自己紹介

統計指導
谷島 利恵子

今度統計課にはいりました谷島です。務め始めてまだ1ヵ月。人の顔と名前がなかなか一致せずとまどうばかりですが、一生懸命頑張りますのでよろしく願いいたします。

私の家には犬がおりまして、身体は大きいくせに名前を「チビ」といいます。この犬、高2の時、私が親の反対を無理矢理に押し切り、勝手に飼い始めたのです。

その当時は、自分のごはんを半分にするとか、おやつは全部あげるとか、散歩は朝晩きちんとやるとかかって、やつと母の許しをもらったものの、父がなかなか許してくれず、それゆえ犬小屋も作ってもらえず、2ヵ月ぐらい私の布団にねかせていました。雑種だといって父は反対したのですが、その雑種にも自慢できることが1つあるのです。それは「散歩に行くよ!」と声をかけると、ひもとくつと手袋を順番に口にくわえてもってくるのです。

そのチビ君。今年の1月にジステンパーにより死にかかったものの、我家の手厚い看護と、飼い主にも似た強じんなる心臓のもとに生き返り、今日も今日とてひもをくわえてかけてくるのです。

追伸：自分の紹介となると、なかなか筆が進まないのので、愛犬「チビ」をして、自己紹介にかえさせていただきます。



雑感

企画分析
勝沼 貞幸

昭和50年の4月に県庁に入ってから6年2ヵ月を経て初めて人事異動なるものを経験した。

前にいたところは同じ企画部の企画調整課だったが、ここは人の回転の早いところで、例年3分の1ずつ人が入れ換っていた。そんなところに6年もいたのはどういう意味なのか考えても分からないので気にしないことにする。

それはともかく、県の総合計画の策定などの仕事をしていたので、国調、県民所得、工業統計などをよく使っていたが、今度は統計のユーザーからメーカーに立場が180度変ってしまった。今までは「統計を作る人は、その統計がどのような使われ方をしているかを十分認識した上で報告書等を作るべきだ」と勝手なことを考えていたが、統計課へ来て1ヵ月程たってみると、逆に「統計を使う人は、その統計がどのようにして作られるかをよく知った上で利用して欲しい」と思うようになった。

よく考えてみると、どちらも非常に大事なことであり、今後は統計の作成者と利用者の相互理解を一層深めていく必要があると思っている。



企画分析
秋山 稔

社会人になって数ヵ月があわただしく過ぎ去り、環境の変化に、いささかとまどいを感じているこの頃である。

まず、昼休みを除いて仕事が続続的に行なわれるため、自分で時間割が組めて定期的に休息がとれる学生時代と比べると、最初のうちは時間的になんかきつという印象をうけた。もう1つの変化といえば、仕事の過程で、考え方に具体性が要求されるということだ。学生時代のような机上の抽象論では役に立たず、実際の仕事の中でいかに具体的に事務を処理してゆくかが大切になってくる。例えば、私たちが日常、何気なく見ている統計データも、実は、調査票1枚1枚の丹念な審査を通じて初めて得られるのであ

